



撫掌記(三)

福島將夫君に寄す
島田忠夫

予も近々平町から雑誌
「うぶすな」を續刊するか
の次ぎに「自説詩人とは
雪と墨の差異がある」とも
福島君はいふ。しかし詩歌
集などを無名の人があやみ
て自費出版などしたがるな
どの餘り感心したことでは
此の道の執心なるべき。
芭蕉はまた「我句ぞ人に説
くは我頗がまら世人に云が
こせし」とも云つたほど
堅人である。現に斯くいよ
予も、先年東京岩波書店か
ら「柴木集」なる童謡集を
購入し、また今年は第二童
謡集と歌集を刊行する積
であ。しかしこれらは何
の名譽にもならぬ。兎んや
肩書にはなり不得ないであら
う。歌集の二三は刊した人
だしなどおどかして他人
の爲すところではない。
さら、芭蕉の「集とは其風
體の句々をわらび、我風情
といふ言を見られた
い。

「歌集の二三は刊した人
の次ぎに「自説詩人とは
雪と墨の差異がある」とも
福島君はいふ。しかし詩歌
集などを無名の人があやみ
て自費出版などしたがるな
どの餘り感心したことでは
此の道の執心なるべき。
芭蕉はまた「我句ぞ人に説
くは我頗がまら世人に云が
こせし」とも云つたほど
堅人である。現に斯くいよ
予も、先年東京岩波書店か
ら「柴木集」なる童謡集を
購入し、また今年は第二童
謡集と歌集を刊行する積
であ。しかしこれらは何
の名譽にもならぬ。兎んや
肩書にはなり不得ないであら
う。歌集の二三は刊した人
だしなどおどかして他人
の爲すところではない。
さら、芭蕉の「集とは其風
體の句々をわらび、我風情
といふ言を見られた
い。

（正）

訂正

昨十八日夕刊本紙

島田忠夫氏「撫掌記」(二七)

行以下「平町の生んだ歌

人忠庵和尚もまた萬葉韻

の歌を残した。忠庵和尚

は幕末の平の藩士であつ

て、天田氏の遺族の方は

生存されてゐる。やうす

を以つて未然に忠告を願ひ

るやうじ」の誤に付き訂

正

（明）

舊月新月

吉凶

曆二曆十二

日

一

（一月十五日夜）

附記、福島君の文を讀む

の心、それはまだすぐれた

歌を繕ければ「平の詩人（

歌人）短歌會を催したり

る。さるに予らは、田町の

高久懸院内木兔莊にて、近

いま手許には士俗學者佐々

木喜善氏の貴重なる研究

と切離しては考へられない

（はい）

